2108　離島覚書（香川県手島）

小手島中学校より手島を望む

令和３年７月 12 日

島民 18 人

丸亀港 11 時 10 分発の客船「ニュービサン」に乗り、手島（てしま）に行く。香川県には、豊島と書いて「てしま」と読む島があるので、耳から聞いただけでは混同してしまう。豊島の方は大量の産業廃棄物が放置された島として有名になった。

到着した客船から 16 人が下船し、私を含めて 19 人が乗船した。客船はとんぼ返りで手島に向かった。途中、広島の江の浦と青木を経由して小手島に寄り、手島は終点である。広島の江の浦で 12 人が下船し１人が乗船した。電中研の作業服を着た若い男性がいたが、ここで降りた。青木で１人、小手島では６人が下船した。昨年、小手島に行った時に一緒だった郵便配達人の姿も見かけた。経由地が多いため、手島に着いたのは 12 時 05 分で、丸亀から約１時間を要した。ちなみに手島と丸亀港を結ぶ航路は備讃フェリー㈱が運航しており、客船が１日２便、フェリーが２便（木曜日以外は客船になる）、の合わせて４便通っている。

昨年、小手島と手島を回る予定だったが、ホテルで眼鏡を失くしたため急遽現地で作ることになり、小手島に行くのは断念した経緯がある。手島に来たのは 1999 年 10 月 27 日以来２度目になる。この時は香川県の仕事だったので、県の船を利用した。したがって 22 年ぶりの再訪ということになる。

手島は 1890（明治 23）年に広島と合併して広島村となり、1958 年に丸亀市に編入されて現在に至る。面積は 3.41 ㎢、周囲が 7.1 ㎞で、塩飽諸島（本島、広島、与島、櫃石島、手島、高見島、牛島を塩飽７島と呼んだ）の中では、広島、本島に次いで大きい。標高は尾方山の 217ｍである。2015 年国勢調査時の世帯数は 21 戸、人口は 30 人であった。22 年前に手島を訪れた時の世帯数は 58 戸、人口は 117 人であったから、この 20 年余の間に世帯数

は半減、人口は 1/4 ほどになった。さらに 2021 年６月１日時点の住民基本台帳上の人口は 17 人（男 10 人、女７人）、世帯数 15 戸である。渋沢敬三のアチェックミューゼアムの一行が手島を 1937 年に訪れた時の世帯数は 160 戸ほどだったので（瀬戸内海島嶼巡訪日記）、この当時と比較すると世帯数は 1/10 になっている。宮本常一はこの時に調査団の一員として手島を調査しているが、「島の住家は 160 戸ほどであったが、80 歳以上の人が 26 人、70 歳から 80 歳までの人が 65 人というありさまで、しかもその老人たちがみな元気で働いていた。80 歳すぎの老人を訪ねていったら『私はまだ若くて昔のことはよくわからん、この上に 93 になる爺さんがいる。その人に話をきいたらよかろう』といわれた。そこで 93 の老人をたずねていくと、畑の中で働いていた。この島は、もうその頃から老人の島になっていたといっていい。島の元気なものは船乗りか大工になって他郷へ稼ぎにいっていた。家には女と年寄りが百姓をつづけていたのである。島の家はどの家も大きく、長屋門のあるのが人名の家であると聞いた」と書いている。

その 34 年後の 1971 年に宮本は再び手島を訪ねているが、「90 歳以上の老人もいたがシャッキリとしていて話に張りのある人はほとんどいなくなっていた」と書く。このような変化が起こったのは戦争のせいだという。太平洋戦争で亡くなった人の墓だけでも 50 を超えるから島を支える中心的世代がいなくなったというわけだ。「長いあいだ作っていたタバコもやめた。島に残っている者は庭木ブームのおかげで山に生えているバベやヤマモモを掘るのを仕事にしている。一本で 1000 円にはなる。それを岡山あたりへもっていくと 5000 円になるという」「かつて塩飽諸島中、農地も広くもっともゆとりのある島であったものが、今まさに火が消えようとする感をふかくするのは、住民の眼が単に外ばかりむいていたためであろうか」と書いている。すでにこの当時から過疎化と高齢化が進行していた。

手島で下船したのはおばあさんと私の２人だけだった。郵便局の服をきた老人が客船のロープを取りにきたが、この人に尋ねると現在の島民は 18 人だという。昨年から今年にかけて７～８人が相次いで亡くなっており、現在は移住してきた陶芸家のペア（姓は異なるので正式の夫婦かどうかわからないとのこと。男性は 30 歳代半ば）を除くと全員が高齢の単身者のようだ。

手島に停泊した客船・ニュー備讃（左）、船客待合室とトイレ（右）

待合室の前にある自動販売機（おそらく島の唯一のもの）で缶コーヒーを購入し、丸亀のコンビニで購入してきたハムサンドを待合室の椅子に腰かけて食べる。待合室に島民の新聞受けが並んでいたが全部で９戸分あった。また観光客向けに持ち運びのできる鈴付のガ

イドシードが置かれていたので、これを借りて島を歩くことにした。

両墓制

待合所のはずれの山裾にたくさんの墓石が並ぶのが見えたので、近くに行った。後でわかったのだが、この墓石群は「埋め墓」であった。塩飽諸島には両墓制の島が多い。つまり死体を埋める埋め墓とお参りする「参り墓」の両方がある葬制である。香川県では塩飽諸島以外にも三豊郡や仲多郡の一部にもみられるらしい。塩飽諸島では高見島や本島などでも確認している。

現在は海岸が埋め立てられているので、以前はすぐ前が海だったと想像される。亡くなった人の遺体はこの埋め墓に穴を掘って埋めた。最近 20 年ほどは、土葬はなくなり島外で火葬されて遺骨だけが戻って来るので、生の遺体でなく遺骨を埋めるという。埋め墓は石塔を建てないところが多いが、この手島では夫婦の氏名が刻まれた石塔が建っていた。参り墓の方は、集落の山側に位置する安養寺と金輪寺の２つの寺の境内に置かれている。

待合所を挟んで反対側の山裾には太平洋戦争で戦死した島民の墓が並び、ひときわ立派な墓石であった。この墓石は埋め墓なのか、参り墓なのかわらないが、その数は 36 基 37 人に及ぶ。この小さな島でこれほどの人数が戦死したのは、宮本の指摘する通り、島にとっては大きな痛手だったに違いない。

海岸近くにある埋め墓（左）、寺の周りに置かれている参り墓（右）

長屋門の家と制札場

港に沿って北に向かうと、今は使われていない香川県農協丸亀北支店丸亀手島事業所と書かれた建物があり、入口付近に郵便ポストが置かれていた。

家の土壁が崩壊し、内部が丸見えになった廃屋などが並ぶ路地を進むと海岸沿いの道路に出た。この道の 100mほど先に朱色の鳥居が見えた。稲荷神社と書かれており拝殿の屋根や窓の縁も同じく朱色に塗られていた。1996 年に改修されたようだが、資金の寄付者は大阪方面に在住の島の出身者が多い。海岸沿いの道路はこの先 100mほどで行き止まりになり、集落に引き返す。

手島の集落は港の背後に形成されている。集落の入口付近に三菱自動車のミニキャブが置かれていた。ところがナンバープレートは日本のものではなく、「TEXAS BLP-9346」と書かれている。米国で使われていたトラックが何ゆえにこの島にあるのか全く謎だ。

集落に入ってすぐのところに立派な長屋門の家が現れた。この家の隣に江戸時代の制札場（高札場）が今でも残っている。おそらくこの家は手島を統括した庄屋・吉田家の屋敷だったのだろう。

手島は小手島を除く塩飽諸島の島々と同様、「人名（にんみょう）の島」であった。旧加子 46 戸、新加子 20 戸の合計 66 戸の人名株があり、154 石を有していた。本島の笠島、泊、高見島に次いで人名が多く、江戸時代は繁栄を謳歌していた。

塩飽諸島の島々は本島にあった勤番所が統括していたが、勤番所から一般に周知するための御触書を掲示したのがこの制札場である。今でいう掲示板で、間口は１間、奥行きは半間だ。この制札場の建物が現在でも残っているのは、この手島の他に本島と櫃石島の２島だけだという。

手島の集落は島の中央に深く切り込んだ湾の山裾に形成されている。中央の湾は後述するように江戸時代に干拓されたようで島では珍しく平地が連なる。家は基本的に平地を挟む山の斜面に石垣を築いてつくられている。アチェックミュージアムの島嶼巡訪日記によると、中村、浦戸、濱村、藤村の４つの部落に分かれていたようだ。

現在は 18 人しか住んでいないので、ざっと 50 軒以上残っている家のほとんどは空き家になっている。この集落のある谷あい以外は現在では森林に覆われているが、高度経済成長期以前には家の背後に段々畑が続いていたものと思われる。

長屋門の家（左）、隣に置かれた手島制札場（右）

漁師ゼロの島

手島の港は地方港湾で、漁港はない。つまりもともと手島ではあまり漁業が盛んでなかったことを反映している。手島港には、クルーザー、モーターボートがそれぞれ１隻、幸進丸という漁船、「第拾壱若潮」と書かれた漁船（実際には使われていない模様）の合計４隻が係留されているだけだった。陸域にはモーターボートが１隻置かれていた。

手島の漁師は本島に本所のある本島漁協に所属しており、手島には漁協の支所はもともとなかった。昨年８月に本島漁協でヒアリング調査した時には、手島には 80 歳代の正組合員が１人おり、建網を営んでいると聞いていたが、今回手島に来て確認すると今年の初めにこの人は亡くなったという。したがって手島には現在漁業で収入を得ている漁師はゼロになっている。

1872（明治５）年当時の手島の職業別戸数をみると、大工職が 68 戸で最も多く、これに

農業の 46 戸が続き、漁業はわずか１戸にすぎなかった。塩飽諸島は操船技術と造船技術に長けていた。造船技術者つまり船大工が多かったのである。木造船が衰退すると船大工は失業することになるが、この技術は家大工に転換することができ、島民の多くは家大工の棟梁のところに見習いに行き、その棟梁のもとで働いたり、大阪や岡山方面の家大工になって出稼ぎに行ったが、この職業構成は島の歴史が反映されている。

一方人名の島であった手島は幕府から漁業権を付与される特権を有していたから、島外の漁民が島の周りで操業する場合、運上金とか網代銀と称するいわゆる入漁料をもらい受けていた。この入漁料は島の 11 人の総代を通じて人名に均等に配分され、魚を現物としてもらう場合も同様に配分されていた。つまり漁業権という特権に胡坐をかいていたことから、「島民は漁師を一段低く見下げたような口ぶり」だったと、アチェックミューゼアムが実施した「瀬戸内海島嶼巡訪日記」に書いてある。

ただ貨幣経済化が進むと農業で食べていくことは難しくなる。大工職の出稼ぎも減ってくると、周囲の海で収入を得なければならなくなり、戦後、漁業に着業する人が増えていった。1973 年に香川県教育委員会が実施した民俗資料緊急調査では、島の暮らしは半農半漁（男漁女耕）で、かつては鯛網やイワシの瀬曳網、延縄などを中心とした漁業を営んでいたが、当時は一本釣、建網、枡網、延縄などの漁業が営まれていたと報告されている。

しかし小規模な漁業は、瀬戸内海の海域環境の悪化や資源水準の低下などを反映して先細りになり、漁業で生活ができなくなると、島民は現金収入を求めて島を去り、高齢化が促進されることになる。そしてとうとう島に漁師はいなくなった。

手島港に係留されている漁船とプレジャーボート（左）、手島港（左）

干拓地と水田

手島港の背後には平地が広がっている。おそらく江戸時代に遠浅な入り江を埋め立てたのだろう。後述するように港から 500mほど内陸部に入ったところに、灯籠（常夜燈）があり、ここが干拓地の境であったとされている。香川県教育委員会の調査報告には、島の古老に聞いた話として、干拓は４期くらいにわたって行われたと書かれている。その証拠が潮止めの土堤が４ヶ所に作られていること、学校から向かいの部落を向部落（つまり海で隔てられていたということ）と呼んでいることだという。

手島港で漁船を観察してからこの平地を歩く。

このように手島は比較的広い平地があったことから農業が盛んであった。アチェックミ

ューゼアムの瀬戸内海島嶼巡訪日記によると、1937 年当時、田が 25 町歩、畑が 70 町歩あったと報告されている。当時の世帯数は 160 戸ほどだったので、1 戸当たりの平均農地面積は 6 反ほどになる。ちなみに人名株をもたない世帯は田畑を所有していなかったので、小作農だったのだろう。この当時、畑では麦と除虫菊が植えられていた。

また、1973 年度に実施された香川県教育委員会の調査では、米、麦、サツマイモ、綿、蕎麦、唐黍、除虫菊などが主要作物であったと報告されている。なお、後述する切符売りのおばあさんの話では、葉タバコが盛んに作られていた時期もあったようだ。

牛は使役動物で農業に不可欠であったから、島のたいていの家で飼っており、多い時には 100 頭余もいたという。ただ 1973 年の時点では耕耘機も普及していたので、４～５頭に減っていた。もちろん今では牛を飼っている家はない。

肥料は海から採取する海藻・草がメインであった。採取する藻場はそれをとる順序が決まっていた。アンジュバンといって、藻場採りに行く順番を書いた板を家から家へ回し、それにしたがって藻場かきに出かけたという。採集した海藻・草は浜で干してオイコ（背負子のことを現地ではこう呼んだ）で運んだ。

干拓地の中央部に道路がつくられており、その両側は田と畑だったと思われる。しかし、現在、水田はヨシ帯に変わり、米は一切作られていない。海岸に近い一部の畑では島の特産品であった唐辛子が作られている。「香川本鷹」という品種で、1955 年ごろまで塩飽諸島を中心に栽培されていた。秀吉の朝鮮出兵に参加した塩飽水軍が朝鮮半島から持ち帰ったものと伝えられている。その後、栽培が途絶えたが、2006 年に本種の種子が発見され、伝統的な作物が手島で復活させることになったようだ。

ヨシやセイタカアワダチソウが繁る水田跡（左）、トウガラシ畑（右）

自然教育センター

平地から家が立ち並ぶ斜面の道路を歩く。石垣が積まれかつては多くの家が建っていたと思われるが、すでに建物が撤去され、石垣だけが残る敷地が目につく。残存する家の中には石垣に土壁を巡らせた豪邸もある。たぶんかつて人名株を持っていた家だろう。

山側の段々畑の一部では、トウモロコシ、スイカ、サツマイモ、ササゲなどが作られている。スイカ畑には鳥よけのネットが張られていたが、それ以外は特段の鳥獣被害防止のための対策は特段施されていない。

山の中腹の道路を下っていくと、干拓地の真ん中あたりに手島小中学校があった。しかし

人口の流出が進み、子供の数は年々減少し、とうとう 1989 年度末（1989 年３月）に閉校に追い込まれることになる。宮本常一が 1971 年に手島を訪れた時、すでに小中学校の生徒は合計して 50 人に足らなかったから、閉校は時間の問題であったのである。島に子供がいなくなってすでに 33 年が経過した。塩飽諸島の中では小中学校がなくなったのは手島が最初で、その後各島に子供がいなくなり、現在、小中学校が残っているのは、本島と小手島（中学生１人のみ）だけになってしまった。子供がいなくなれば島の活力は急速に衰え、手島はその道を歩んできた。

この小中学校の跡地は自然教育センターとして活用されている。多度津町に属する高見島の小中学校も同様である。何とか建物を活かそうとする苦肉の策なのだろう。しかし手島は高齢者ばかりなので対応が難しいため、センターの運営は隣の広島にあるＮＰＯ法人石の里が管理、運営にあたっている。このセンターにはＲＣ２階建ての校舎を活用した屋内宿泊施設と屋外にキャンプ場があり、研修室、体育館、調理室、浴室なども整備されている。

この日は校舎跡にも周辺にもだれもいなかった。施設の利用実態はわからない。

自然教育センターとして活用されている旧手島小中学校（左）、共同炊事場（右）

寺と神社

自然教育センターの背後の森に八幡神社と、安養寺と金輪寺（きりんじ）という２つの寺がまとまっている。今では人口が 18 人に減ってしまった島として信じがたいことだが、江戸時代には人名の島として、海運業の島として繁栄していた証なのだろう。

ウバメガシの林の中に築かれた長い階段を登った先に八幡神社があった。応神天皇を祀った神社とされている。拝殿の手前の建物に木製の飛行機のプロペラが吊り下げられていた。戦前、飛行機製造に従事した人が奉納したとされているが、木製のプロペラが実際に使われていたかどうかはわからない。

拝殿の修復は 1994 年に行われているが、この時の寄付者名簿には 135 人が名を連ねている。すでにこの時代は人口減少が顕著になっており、寄付者の多くは島の出身者で島外に住んでいたものと思われるが、それでも故郷に神社のために寄付したのだろう。しかし、次の修復時に果たしてこれほど多くの寄付者が確保できるのかどうか甚だ疑問だ。世代交代が進めば、島に関心を持つ人も少なくなるだろう。また連絡すらとれなくなるに違いない。

金輪寺は八幡神社の東隣り、安養寺はさらにその上の段にある。この一帯は森林に囲まれ不気味なほど静かであった。両寺共に真言宗の寺で、前者は善通寺派（総本山は香川県）、

後者は醍醐派（総本山は京都府）に属している。

金輪寺には現在寺の建物はなく、木造薬師如来坐像、木造持国天立像、木造多聞天立像を所蔵する建物があるだけだ。これらの仏像は何れも丸亀市の指定文化財になっている。一方、安養寺は寺の建物が現存しているが、住職はいない。寺の他に鐘楼もある。寺の本尊は平安時代につくられた阿弥陀如来である。また境内には鎌倉時代前期に造られた平家にゆかりの宝塔（柔らかくて細工がしやすい凝灰角礫岩で作られている）が置かれており、何れも丸亀市の指定文化財となっている。寺の周囲には墓地があり、上述した通り、参り墓となっている。墓石は古いものが多く、歴史を感じさせる。ただし、島に人が少ないため、管理は行き届いていない。

八幡神社に至る石段（左）、安養寺の建物と境内（右）

西浦海岸

手島港のちょうど反対側にあたる西側には西浦と呼ぶ海岸が連なっている。安養寺から坂を下って西浦海岸に向かう。

干拓地と山裾の集落の間に道があり、この道路脇にキューイフルーツやらミカン、カキなどが植えられた果樹畑があり、リンゴの木も植わっていた。道端で草を刈っている人がいたので立ち話をする。この人は四国の善通寺に住んでおり、生家がこの近くだそうだ。年頃は私と同じくらいで、リタイア後、生家の周辺が荒れないように毎週草刈りにきているという。果樹は彼が楽しみに作っているのだった。「リンゴは暖かすぎるのでは」と問うたら花が美しいので植えているので実は当てにしていないとのこと。

果樹園の前はヨシ原になっていたが、以前は田んぼがあり、米を作っていたという。以前海だった境にある灯籠はこの道を進んだ先を左折するとすぐに見つかると教えてもらった。彼の生家は、江戸時代まで北前船をもっていたそうだ。

瀬戸内海のほとんどの島にイノシシが生息しているが、手島では特段の防護柵は講じていなかった。彼の話では、最近大きなイノシシが３頭捕まり、その後姿が見られなくなったという。少し島の事情を聞いて、西海岸に向かう。彼のような時々草刈りに来る人がいれば、島は荒れないのだが、その数は高齢化の進行とともに減ってくるのは間違いない。

緩やかな坂を登り、下った先が西海岸である。シマダスの地図には西海岸の手前にひまわり畑があることになっているが、今年は管理する人がいないのか、一面雑草に覆われていた。島を紹介するインターネットにはひまわり畑の写真が出てくるが、やはり人が少なくなる

と何もできなくなる。西海岸の周辺には以前人家があったが、港の近くに移り、現在は一軒の家もない。海岸近くに作業小屋があり、その前に海底送水管の受水槽があった。丸亀から島伝いに上水道の管が敷設されている。

ちょうど満潮に近かったが、西浦海岸は弓なりで美しく、眼前には多数の島々が広がる。砂は中砂ほどで、海水浴場としてはもってこいの場所だが、如何せん海岸には多数のプラスチック製の廃棄物やら、木片、海草などが打ち上げられていて、せっかくの環境が台無しになっている。島に住む人は少なくしかも超高齢者ばかりだから海岸清掃もままならないのだろう。季節的には海水浴客がいてもおかしくないのだが、新型コロナの影響をうけてなのだろうか、人っ子一人いなかった。

ところが海岸に着いたころに遠雷が聞こえ始め、雨が降りだした。海岸から少し山の中に入ったところに安養寺にあったような宝塔や石棺があると、待合所で借りたガイドシートに記されていたのでそこまで行ってみようと傘をさして歩き始めた。しかし、山の中に少し入ると雨はますます強くなり、断念せざるを得なくなった。なお山道にイノシシが掘ったと思われる場所が１ヶ所あったので、手島にイノシシがいるのは間違いない。

受水槽のある場所まで戻ったが、この建物の周りは柵がしてあって中に入ることができない。しかたなしにその前にある小屋の軒先で強い雨が通りすぎるのを待った。ところが軒先は短く、笠を前面に立てないと雨をしのぐことができない。15 分ほど雨宿りをしたところで少し雨の勢いが収まるのを見計らってより確実な雨宿り場所を求めて、集落の方へ移動した。

集落の最初の家に屋根付きの比較的広い門があったので、そこで再び雨宿りとなった。門の扉に鍵がかかっているのでこの家は空き家のようだが、庭の草もきれいに刈られていた。時々家の手入れに来る人がいるものと思われる。雨が降り始めたことで空を飛ぶ虫が増えたようで、ツバメの動きが活発になり、盛んに付近を飛び回っている。雷は段々近づき、その後遠ざかった。この場所で 10 分ほど雨宿りを余儀なくされる。

ヒマワリが咲き誇っているはずの場所は雑草に覆われていた（左）、ゴミが多く漂着する西浦海岸（右）

旧ラーセン邸

島の南端のくわの浜という場所にノルウェーで海運会社を経営していたラーセンという人がつくった別荘がある。集落から山道を２㎞ほど歩かなければならない。人家の門の前で雨宿りしていたが、雨も小降りとなってきたので歩くことにした。50mほど進んだところで

干拓場所の境に位置する石の灯籠を見つける。

集落を過ぎると池が現れた。池の下流は干拓地で、だいぶ以前は米がつくられていたから池は水田に水を供給するための溜池だったのだろう。旧ラーセン邸までの山道はコンクリートで舗装されている。車は通れないが、ラーセンが別荘に通うために道路を整備したのだろう。しかしその後繁殖した孟宗竹が道の両側に迫り、竹の葉が道の上に積り、折からの雨できわめて歩きづらい。別荘がつくられた当時は道の両側に農地が広がっていたと思われる。しかし現在は竹林と雑木で覆われ、うす暗い。小さな峠を越えて坂を下った先が旧ラーセン邸であるが、この最後のアプローチである坂道は両側から草が生い茂り、濡れた草でズボンと靴はびしょに濡れになってしまった。

ラーセンは坂出に工場のある川崎重工に自社船を発注した。来日したラーセンは瀬戸内海の多島美にすっかり魅了され、この地に別荘を建てたのだった。ちなみに宮本常一が 1971 年に手島を訪れた時にはすでにラーセン邸はあり、その当時の写真が残されている。したがって別荘が建てられたのは 1970 年ごろのことであろう。ラーセンは神戸に住んでおり、年に何回かこの別荘を利用したようだ。

ラーセンが別荘として利用していたのは 1970 年から数年のことで、その後、川崎重工の保養所になり、長いこと同社が従業員の保養所として使っていた。そして今から 7 年ほど前に多度津に本社のある合田マリンに周囲の山林を含めて約 1 億円で売却している。合田マリンの管理になってからは別荘の利用者はもっぱらモーターボートを利用してくわの浜に上陸するから、昔の山道を利用していない。このことが手島港からラーセン邸への山道を荒廃させているわけなのだ。

旧ラーセン邸は木造平屋建てで、中央付近に暖炉の煙突が建つ。カーテンが掛かっていて室内をうかがい知ることはできなかった。本邸の脇には管理人用の建物もあった。正面に小豊島を一望できる絶好の景観である。別荘の脇には小さな池があり、日本風の庭園に仕立てられているが、手入れは行き届いていない。別荘の下段には例の唐辛子が植えられていた。浜にはシャベルカーが置かれているところをみると、浜からのアプローチの整備が進められているのだろう。

雨が降り続いているので、別荘周辺を十分に観察する間もなく、15 時 25 分に旧ラーセン邸を後にし、港に戻ることにした。

旧ラーセン邸の全景（左）、旧ラーセン邸への山道（右）

ホームヘルパー

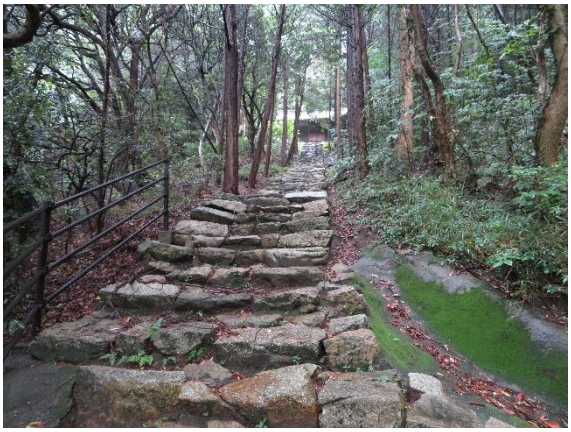
雨で足元はすっかり濡れてしまった。うす暗い山中にはやぶ蚊が多い。バックパックは丸亀駅のコインロッカーに預けてきたので、手提げ袋一つと身軽であるが傘をさしているから追い払うのが大変だ。

16 時ちょっと前に港に戻り、近くにある東照神社を訪ねた。権現神社とも呼ばれ、島には神社があわせて３つもある。社殿は長い石段の先にあり、周囲は木々に覆われている。脇に車が通れるコンクリート舗装の道があったので、そちらを選んだが失敗だった。道路は最後の部分が膝丈ほどの草が繁っている。坂を登って元来た道を引き返す手もあったが、急坂を登る気力は失せていたのでそのまま草原に突っ込んだ。おかげでズボンの下半分はさらにびしょ濡れになってしまった。

船客待合室には切符売りのおばあさんがおり、帰路の切符を購入し、島のことを聞く。彼女の話では、今年になって自治会長を含めて、島の老人８人が相次いで亡くなったそうだ。

そこに、「今日の雨がすごかったね」と言いながらホームヘルパー（訪問介護員）の女性が入ってきた。彼女は隣の広島に住んでおり、週に１回、島の老人たちを介護するために来ているという。洗濯や掃除、食事など身の回りの世話をしている。島には現在介護が必要な高齢者が３人いるそうで、彼女以外にもう一人のヘルパーがおり、２人が交代で面倒をみているそうだ。ホームヘルパーが来ない日は子供などの親戚縁者が定期的に来ているらしい。彼女の家は、広島で採石業を営んでいたがすでに廃業し、子供たちも家を出ている。広島も急速に過疎化、高齢化が進んでおり、彼女たちがホームヘルパーの世話になるのもそれほど遠くない将来のように思える。

人名の島として繁栄を謳歌した手島はもはや風前の灯であり、在来島民は少なくとも 10 年以内にはいなくなるだろう。島出身のＵターン者や移住者が加わらなければ、手島は無人島化が現実となる。



待合所近くに置かれている大東亜戦争で戦死した人の墓（左）、東照神社への参道（右）

この日はいつものフェリーはドック入りしており、代船が就航していた。フェリーには草刈りにきていた男性とホームヘルパー、そして私の合計３人が乗り込む。16 時 55 分に出発し、広島の青木及び江の浦を経て、定刻よりも 10 分ほど早い 18 時に丸亀港に着いた。

丸亀駅のコインロッカーからバックパックを受け取り、時間があったので駅前の以前入ったことのある「西竹」という食堂でタコをつまみに生ビールを飲む。特急で岡山駅に出て、

岡山駅でアナゴ天丼を食べ、新幹線に乗り換えて広島駅に向かった。

【文献】

アチェクミューゼアム（1940）：9.手島、瀬戸内海島嶼巡訪日記、アチェクミューゼアム．49-54.

宮本常一（2015）：11.手島・小手島、私の日本地図 12、瀬戸内海Ⅳ、備讃瀬戸付近．未來社．東京．132-137.

香川県教育委員会（1974）：民俗資料緊急調査報告書、塩飽諸島のうち広島・手島・小手島．生業．手島．27-34.

豊島の石を使って家形につくった。